

6 CY1非切除胃癌における Second look laparoscopy の有用性についての検討

濱 勇・古川 浩一・河久 順志
横尾 健・相場 恒男・米山 靖
和栗 暢生・杉村 一仁・五十嵐健太郎
月岡 恵・桑原 史郎*・片柳 憲雄*
橋立 英樹**・渋谷 宏行**

新潟市民病院消化器科
同 外科*
同 病理**

今回、腹膜播種の治療効果判定のため second look laparoscopy (SLL) を導入しその有用性について検討した。

2005. 2月～2008. 5月までの初回手術時に P1 または Cy1 でバイパス術または審査腹腔鏡のみを施行された 25 症例のうち、3ヶ月以上の治療期間で画像検査上、治療切除不能因子を認めない平均年齢 60.8 歳の 9 症例 (男 8, 女 1) に SLL を施行した。

初回手術から SLL までの期間は、中央値が 6.3 カ月 (3.8 - 12.9) であった。結果は P1 または Cy1 が 6 例, P0Cy0 が 3 例であった。同 3 例に対し原発切除を施行し化学療法を中止した。2 例は SLL の早期介入例であった。現在、1 例に腹膜再発を来し化学療法を再開している。

以上より SLL の時期については早期介入の検討が必要であると考えられた。また原発切除可能例に対し化学療法を追加するかは今後症例の蓄積による検討が必要と考えられた。

7 Siewert type II 食道胃接合部腺癌のリンパ節転移に関する臨床病理学的検討

矢島 和人・神田 達夫・鈴木 力*
羽入 隆晃・坂本 薫・石川 卓
松木 淳・小杉 伸一・畠山 勝義
新潟大学大学院医歯学総合研究科
消化器・一般外科学分野
新潟大学医学部保健学科*

【目的】食道・胃接合部癌のリンパ節転移の実態と予後を明らかにする。

【対象と方法】2007年までに新潟大学病院で完全切除された Siewert type II 食道胃接合部腺癌患者 123 名の組織学的リンパ節転移と予後を臨床病理学的に分析した。

【結果】深達度別のリンパ節転移率は、T1 が 0%, T2 が 50.0%, T3 が 90.0%, T4 が 87.5% であった。リンパ節転移陰性例の 5 年生存率は 85.2%, 陽性例のそれは 35.8% であった。下縦隔郭清が 69 名に行われており、下縦隔リンパ節転移率は、T1 が 0%, T2 が 66.7%, T3/4 が 92.5% であった。下縦隔リンパ節転移は食道浸潤長 2cm を超えるもので 40%, 腫瘍中心が食道側に存在するもので 50% であった。下縦隔リンパ節転移陽性 13 名の 5 年生存率は 23.1% であった。

【結語】T1 食道胃接合部腺癌リンパ節転移率も低く、内視鏡治療や縮小手術も可能と思われる。一方、T2 以深の腫瘍ではリンパ節転移率も高く、予後不良となる。

8 進行胃癌・リンパ節転移陽性胃癌に対する腹腔鏡補助下幽門側胃切除 (LADG) の適応

桑原 史郎・片柳 憲雄・前田 知世
澤岬 安勝・野上 仁・横山 直行
山崎 俊幸・大谷 哲也

新潟市民病院外科

【背景】進行胃癌、リンパ節転移陽性胃癌に対する LADG の適応は不明である。

【目的】進行癌、リンパ節転移例に LADG がどこまで適応可能か検討する。

【方法】当科では 2002 年 4 月より LADG (D1 + α/β , D2 郭清) を導入し、現在までに 265 例に施行した (観察期間中央値 540 日)。これらの症例のリンパ節郭清個数および再発率を、背景因子・観察期間のほぼ等しい開腹胃亜全摘 (ODG) と比較し、LADG が進行胃癌やリンパ節転移例に対してどこまで適応可能か検討した。

【結果】LADG 群 (n = 265) と ODG 群 (n = 137) のリンパ節部位別郭清個数は D1 + α/β リンパ節 (# 1, 3, 4d, 4sb, 5, 6, 7, 8a, 9) で両群間に差を認めず、また、11p, 12a, 14v リンパ節郭